

# ランプの影

正岡子規

青空文庫



病やまいの牀とこに仰向やうきやうに寐ねてつまらなさに天井てんけいを睨にらんで居ると天井板てんけいばんの木目きもが人の顔かほに見える。

それは一つある節穴ふしあなが人の眼まなこのように見えてそのぐるりの木目きもが不思議ふしぎに顔かほの輪廓りんがくを形かたちづくつて居る。その顔かほが始終しじう目めについて気きになつていけないので、今度は右向みぎむききに横よこに寐ねると、襖ふすまにある雲形うんがたの模様ようばうが天狗てんぐの顔かほに見える。いかにもうるさいと思おもうてその顔かほを心こころで打ち消くして見ると、襖ふすまの下したの隅すみにある水みづか何かなにのしみがまた横顔よこがほの輪廓りんがくを成なして居る。仕方しかたがないから試たまに左向ひだりむききに寐ねて見るとガラスがらすごしに上野じやのの杉すぎの森もりが見みえてその森もりの隙間すきまに向むかうの空そらが透とおいて見える。その隙間すきまの空そらが人の顔かほになつて居る。丁度ちやうど画探えがたんしの画えがのようようで横顔よこがほがやや逆さかさになつて見えるのは少し風変かぜがりの顔かほだ。再び仰向やうきやうになつて、今度は顔かほのない方の天井てんけいの隅すみを睨にらんで居ると、馬鹿ばかに大きな顔かほが忽こつぜん然ぜんと現あられて来る。

かように暗裏あんりの鬼神きしんを画えき空中くうちゆうの楼閣ろうかくを造つくるは平常ひやうじやうの事ことであるが、ランプの火影ひかげに顔かほが現あられたのは今宵こんやが始めてである。

『ホトトギス』所載しよざいの挿画さうが

年の暮ゆふの事ことで今年ことしも例れいのようように忙いそしいので、まだ十三じゅうさん、四日よっぴの日子ひを余あまして居ゐるにもか

かわらず、新聞へ投書になつた新年の俳句を病牀で整理して居る。読む、点をつける、それぞれの題の下に分けて書く、草稿へ棒を引いて向うへ投げやる。それから次の草稿へ移る。また読む、点をつける、水みづ祝いわいという題の処へ四、五句書き抜く、草稿へ棒を引いて向うへ投げやる。同じ事を繰り返して居る。夜は纔わずかに更ふけそめてもう周囲は静まつてあゝ。いくらか熱が出て居るようでもあるが毎夜の事だからそれにも構わず仕事にかかつて居る。けれども熱のある間は呼吸が迫るので仕事はちつともはかどらぬ。そのみでない蒲団の上に横になつて、右の肱ひじについて、左の手に原稿紙を持って、書く時には原稿紙の方を動かして右の手の筆の尖さきへ持つて往てやるという次第だから、ただでも一時間か二時間かやると肩が痛くなる。徹夜などした時は、仕事がすんでから右の手を伸ばそうとしても容易に伸ばす事が出来んようになってしまふ。今日も昼からつづけさまに書いて居るので大分くたびれたから、筆を投げやつて、右の肱ひじを蒲団の外へ突いて、頬杖ほおづえをして、暫く休んだ。熱と草くたびれ臥たひとで少しぼんやりとなつて、見るともなく目を張つて見て居ると、ガラス障子の向うに、我枕元にあるランプの火の影が写つて居る。もつともガラスとランプの距離は一問余りあるので火の影は揺れてやや大きく見える。それをただ見つめて居ると涙が出て来る。すると灯が二つに見える。けれどもガラスの疵きずの加減であるか、その二



去冬

つの灯が離れて居ないで不規則に接続して見える。全くの無心でこの大きな火の影を見て居るとその火の中に俄にわかに人の顔が現れた。

見ると西洋の画に善くある、眼の丸い、くるくるした子供の顔であった。それが忽ち變つて高帽の紳士となつた。もつとも帽の上部は見えて居らぬ。首から下も見えぬけれど何だか二重廻にじゅうまわしを著て居るように思われた。その顔が三たび變つた。今度は八つか九つ位の女の子の顔で眼は全く下向いて居る。額ひたいぎわ際ぎわの髪にはゴムの長い櫛くしをはめて髪を押さえて居る。四たび變つて鬼の顔が出た。この顔は先日京都から送つてもろうた牛祭の鬼の面に似て居る。かようにして順々に變つて行く時間が非常に早くかつその顔は思わぬ顔が出て来るので、今度は興に乗つてどこまで変化するかためして見んと思いはじめた。まるで見せ物でも見るような氣になつたのだ。そう思うとそれから変りようがやや遅くなつた。その次には猿の顔が出た。それが西洋の昔の学者か豪傑かの顔と變つた。その顔は少し横向きで柔かな髪は肩まで垂れて居る。極めて優しい顔であるがただ見たように思うだけで誰の肖像か分らぬ。それから暫くは火が輝いで居るばかりで何の形も現れて来ぬ。なお見つめて居ると火の真中に極めて明るい一点が見えて来た。それが次第に大きくなって往く。終に一つの大目玉が成り立つた。それが崩れるとまた暫く何も出来ずに居たが、よう

よう丸鬚まるまげの女が現れた。その女の鬢びんが両方へ張って居るのは四方へ放って居る光線がそ  
 う見えるのである。その光線の鬢は白くまばらなので石膏細工せつこうの女かと思われた。この  
 女は初め下向いて眼を塞ふさいで居たが、その眼を少しづつ明けながらその顔を少しづつあげ  
 ると、段々すさまじい人相になって、遂に髪かみの逆立った三三さんぽう宝荒神こうじんと変つてしもうた。  
 荒神様が消えると耶蘇ヤソが出て来た。これは十字架上の耶蘇だと見えて首をうなだれて眼を  
 つぶつて居るが、それにもかかわらず頭の周囲には丸い御光が輝いて居る。耶蘇が首をあ  
 げて眼を開くと、面頬めんほおを著つけた武者の顔と変つた。その武者の顔をよくよく見て居る内  
 に、それは面頬でなくて、口に呼吸器を掛けて居る肺病患者と見え出した。その次はすつ  
 かり變つて般はん若にやの面が小さく見えた。それが消えると、癩病らいびんの、頬ほのふくれた、眼を剥むい  
 だような、気味の悪い顔が出た。試にその顔の恰かつこう好こうをいうと、文学者のギボンの顔を餚あめ  
 細工でこしらえてその顔の内側から息を入れてふくらました、というような具合だ。忽ち  
 火が三つになつた。

何か出るであろうと待つて居るとまた前の耶蘇が出た。これではいかぬと思つて、少すこく  
 頭を後へ引くと、視線が變つたと共にガラスの疵きずの具合も變つたので、火の影は細長い鍵かぎ  
 のような者になつた。今度はきつと風變りの顔が見えるだろうと見て居たけれど火の形が

変なためか一向何も現れぬ。やや暫くすると何やら少し出て来た。段々明らかになつて来ると仰あおむけ向むけに寐た人の横顔らしい。いよいよそうときまつた。眼は静かに塞いで居る。顔は何となく沈んで居て些いささかの活気もない。たしかにこれは死人の顔であろう。見せ物はこれでおやめにした。

〔『ホトトギス』第三卷第四号 明治33・1・10〕



# 青空文庫情報

底本：「飯待つ間」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年3月18日第1刷発行

2001（平成13）年11月7日第10刷発行

底本の親本：「子規全集 第十二卷」講談社

1975（昭和50）年10月刊

初出：「ホトトギス 第三巻第四号」

1900（明治33）年1月10日

※底本では、表題の下に「子規」と記載されています。

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2010年5月19日作成

2012年5月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ランプの影

正岡子規

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>